



## 伝える匠の技

### —紀州漆器—

「のりえ、今度の土曜日に家のみかんとりを手伝ってくれないかな。お父さんは仕事があつて、おじいちゃん、おばあちゃんとお母さんの三人しかいないの。」

学校に行こうとしていた私に、母が言った。私の家は、代々続くみかん農家だ。父と母は、会社で働きながら休みの日に畑仕事を手伝っている。私も時々手伝うが、みかんを一つ一つ丁寧に取るのも面倒くさいし、とったみかんを入れたコンテナは重く、運ぶのにすごく疲れる。

（今から気が重い。土曜日は天気もよさそうだし、なんとかさぼれないかな。）  
と考えていると、昼休みに、

「のりえ、今度の土曜日、総合的な学習の時間に二人で調べている紀州漆器の聞きとり調査に行こうよ。先生がそろそろグループでまとめるように言ってたでしょ。」

と、果歩が誘ってきた。

（そうだ、学校の勉強だと言ったら、きっとお母さんも認めてくれるはずだ。）

さっそく、私と果歩は、先生にお願いして、紀州漆器の伝統工芸士の方に連絡をとってもらい、聞きとり調査に行くことにした。

家に帰って母に、

「お母さん、今度の土曜日、果歩ちゃんと一緒に、総合的な学習の時間でやっている調べ学習の聞きとり調査に行きたいの。もう先生が、紀州漆器の伝統工芸士の方に連絡をとってくれているの。今度の土曜日にみかんとりができないんだけれど……。」

と、話した。すると、母は少し考えた後で、

「仕方ないわね。果歩ちゃんに迷惑をかけられないしね。気をつけて行ってらっしゃい。」  
と、言ってくれた。



土曜日のお昼過ぎに、私たちは、伝統工芸士の工房をたずねた。私たちの質問に答えてくれたのは、伝統工芸士のおじさんと、お姉さん（おじさんの娘）だった。

まず最初に、お姉さんが漆を塗った壺を前にして説明をしてくれた。

「紀州漆器は六百年の歴史があると言われていているの。それに漆器は軽くて割れにくいし、水にも強いんですよ。日々使うほど手の脂が漆器について、つやが出るの。漆器は芸術品ではなく、毎日使う道具なのよ。」

私たちは、目の前にある美しい漆器を見ながら、お姉さんの説明を興味深く聞いた。

次に、おじさんが、倉庫に案内してくれた。そこには、まだ漆を塗っていない状態の大きな木の壺や盆、杯がたくさんあった。よく見てみると、壺に「昭和五十四年（一九七九年）」と書かれていた。

「この壺、かなり古いんですね。」

と、私が聞くと、おじさんは、

「そうだね。木をけずる伝統工芸士は、もう一人しかいないんだよ。」

と、話してくれた。

一階の見学が終わると、二階にある仕事場を見せてくれた。

「二階の部屋でとびらを締め切って仕事をするんだよ。漆を塗る時は、たとえ親子でも別々の部屋で集中してやるんだよ。」

おじさんは、話した後で、使い込んだ道具を見せてくれた。その中に、漆を塗るためのはけがあった。

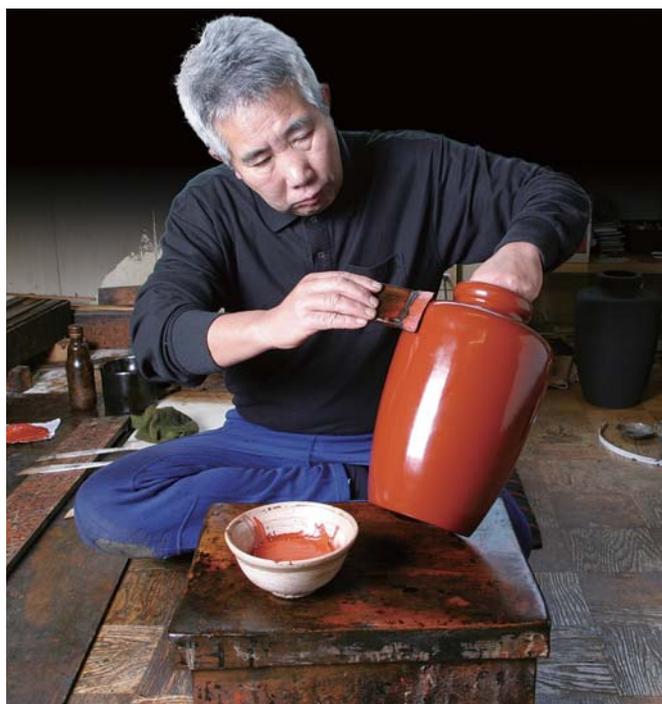
「今となっては、このはけをつくる人もいないんだよ。若い人たちに跡を継いでもらいたいんだけどね。」

おじさんの話を聞いて、果歩が、

「昔ながらの紀州漆器づくりを続けている方は、今は何人ぐらいいるのですか。」

と、たずねた。おじさんは、はけを見ながら、

「伝統工芸士は、私たち二人を含めて四人だけなんだよ。」



と、さみしそうに言った。私は、おじさんの横顔をじっと見つめながら、話を聞いていた。そして、思いきってお姉さんに質問した。

「どうして、おじさんの跡を継いで、伝統的な紀州漆器づくりの仕事をしようと思ったのですか。」

「小学校の時、友達の家がすべて漆器屋だったのよ。高校、そして県外の大学に通うようになって、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではないと知ったの。その時、私がこの仕事を引き継ぐうと思ったの。」

私は、お姉さんの言葉にはっとした。続けて果歩が、

「仕事をしていて、一番うれしいのは、どんな時ですか。」

と、聞くと、おじさんは、

「注文された漆器をすべて完成させた時かな。『ふう、やっと終わった。』という気持ちになるね。それ

と、お客さんから、私たちがつくった漆器を使ってくれているという話を聞いた時かな。」

と、笑顔で答えてくれた。

私たちはお礼を言って伝統工芸士さんの工房こうぼうをあとにした。果歩かほは私に、

「今日はいいい勉強べんきょうになったね。しっかりとまとめられそうね。」

と、言った。私は、みかんとりをしている母の姿すがたを思い浮かうべながら、

「果歩、ありがとう。私、お母さんに話をするわ。」

と、言った。果歩は不思議ふしぎそうに私を見返した。

(作成協力・写真提供)

・紀州漆器協同組合

・谷岡漆芸店